

## 農食彩のエキスパートを育てる実践教育(2)

誌名	畜産の研究 = Animal-husbandry
ISSN	00093874
著者	里村, 孝一
巻/号	63巻2号
掲載ページ	p. 229-231
発行年月	2009年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 農食彩のエキスパートを育てる実践教育（2）

里村孝一\*

### 6 農業大学校の教育状況は

ここでは、新潟県農業大学校全体の教育状況や特徴についてお話ししたい。

本校は大きく分けて、学生教育の農学部と農家・一般県民の研修を行う研修センターの二つの指導部門で構成されている。

#### (1) 農学部は

##### ア 学部構成

最初に農学部は、短大部門の学科（二年制）と学科卒業後に進学できる大学部門の研究科（二年制）



写真6 田植え作業中の稲作専攻生

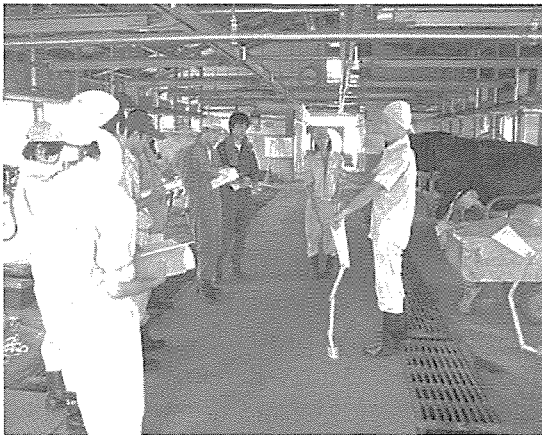


写真7 削蹄技術学習中の酪農専攻生

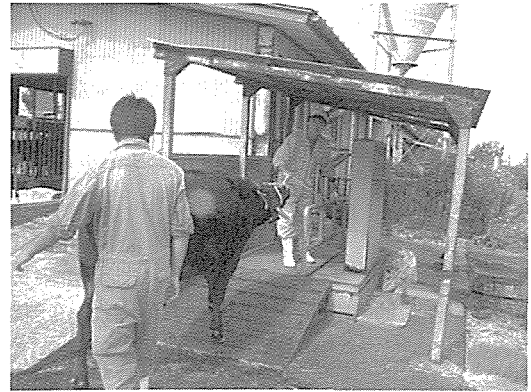


写真8 体重測定作業中の肉用牛専攻生



写真9 育苗作業中の野菜専攻生

で構成されており、「農・食・彩」で活躍する経営と指導のエキスパートを育てることを目標に教育指導を実施している。

#### イ 学科について

学科については、稲作経営科（稲作専攻）、園芸経営科（野菜・果樹・花き専攻）、畜産経営科（酪農・肉畜専攻）の3学科6専攻で構成されている。

学習科目は、教養科目、専門共通科目および専攻科目からなり、平成20年度のカリキュラムから学習科目の選択制を拡大。とくに、他科の専門科目も幅広く選択できるようになっている。例えば、稲作の学生がプラス園芸や畜産を選択し学べるなど、総合的な学習ができるよう専門科目を開放している。

\*新潟県農業大学校 校長(Kouichi Satomura)

## ウ 流通販売の実施

また、流通・販売・加工および情報学習にも力を入れ、さらに環境農業・食品の安全教育も実施。

とくに、流通販売では、「自ら売る」実践を実行するため、毎週1回の園芸直売市(構内)やインショップ(地元スーパーマーケット)を開設している。いずれも人気があり、短時間で完売する品目が続出している。学生販売員も今年はずいぶん上手になっている。

また、昨年からは農大産の野菜と米を学内の業者食堂に販売もしている。昨年は、試験的に酒造業者と提携し、農大産酒米「越淡麗(こしたんれい)」を使い、農業大学校名と自ら考えた名称、超吟醸酒「きらきら」として限定販売も行った。さらに10月から、精米も直売市で販売を開始している。

生産技術だけでなく、単に市場出荷だけではなく、作ったものを自ら工夫して販売するという学習の基礎も学べるようにしている。



写真10 果実調査中の果樹専攻生



写真11 チューリップ調査中の花き専攻生

残念ながら、畜産物については、法的な制約条件が多いため、未実施であり、今後の課題となっている。

現在、大学校における流通販売加工教育の充実強化について、検討を続けている。

## エ 専攻の特徴

次に、各専攻での総括的な特徴をお話します。

稲作経営科は、その経営実習の特徴として、23ヘクタールという広大な水田を活かして、2年生になると学生1人当たり、50アール区画の水田を担当させ、農場チームを組んで資格取得した大型機械を駆使しながら経営実践教育を行わせている。農家出身者であってもこれだけの面積を任せられた経験はなく、稲作を実施したという体験に学生たちは達成感から一回り大きく成長していく。

園芸経営科は、ハウス、環境制御温室、露地圃場等を活用して県の重点品目を中心に経営実践教育を実施し、バイオ技術も併せて学んでいる。

とくに、消費者からの評価が即結果として示される直売や市場出荷などをとおして、品質、安定供給の重要性を強く意識した管理と収支経営感覚に目覚めてゆく。

畜産経営科は、搾乳ロボット、ビタミンA濃度測定利用などの肥育技術や8ヘクタールの飼料作圃場を使った自給飼料生産などにより、高品質で美味しい牛乳、牛肉の生産。そして加工技術を学ぶ。とくに、家畜を扱うことは、管理の反応が直視でき、しかも、「なつく」という行動があって、日常的に確かな観察と管理の重要性をしっかりと見極める大切さを学び、行動的な学生に育っていく。

三つの経営科に共通する学習として、先進経営等体験学習がある。これは、先進的農家に泊まり込み実習で、本校では期間は短いのですが、1学年が9月と2学年が6月に各学年が2班に分かれて実施している。

この教育効果は大きく、農作業を実施しながら、大学校ではなかなか教えられない経営主の実践的経営哲学を直に学べる絶好の機会であり、受入農家も毎年楽しみに待ってくださっている。とくに、目標をしっかりと持っている1年生や農業というものが少しずつわかってきている2年生は、いい加減さが影を潜め、その後の学習や将来の目標設定に対する姿勢や考え方がより真剣な形に変わることが多い。

## オ 研究科について

本校の学科や農業関係の短期大学の卒業で入学できる各学年定員 10 名の研究科では、就農者コースと指導者コースを設けており、課題解決研究を中心に技術の高度化を学んでいる。

とくに、研究科 2 学年（大学 4 年生に相当）では、就農者コースが先進的な経営農家等と大学校園場を活用して課題解決の学習を行い、指導者コースは、県の研究機関に長期派遣して研究員の指導のもとに技術開発を学び、指導者をめざしている。

### (2) 研修センターは

研修センターの開設する研修は、就農支援の担い手育成研修 5 コース、起業支援など農政課題研修の 7 コース、農業機械研修の 9 コース、農産加工研修 3 コース 6 品目、農業体験研修 5 コースを設定している。

どのコースも定員を大きく上回るほど人気があり、参加者も多様になっている。中でも農産加工研修については人気が高く、出張指導研修も実施している。

平成 20 年から 1 年研修コースの「新潟やるき農業塾」を開設し、現在 4 名が参加している。

研修センターの研修には、幼稚園生から 60 歳代まで年間 3、600 名以上の幅広い利用があり、普及指導、農産加工、農業機械分野の専任職員 6 名で対応している。開かれた教育機関としての期待と効果が大きく現れている。

## 7 農業大学校がめざす人材育成は

### (1) 農業大学校入校の環境

本県の新規就農者は、県の目標の年間 280 人に対して、毎年、7 割程度の確保になっている。担い手確保が重要な課題であり、農業大学校への担い手育成の期待は大きい。

入校の主力である本県の農業高校と農業系の総合高校 2 年生の就農意向調査結果を見ると、うれしいこと、考えなければならないことがある。

「育てる喜び」を一番に上げ、約 35% の生徒が「農業が好き」といっている。反面、農業に接する機会が多いと思われるのに、非農家出身の生徒が 7 割を占めていることの影響なのか「どちらとも言えない」が 6 割を超え、農や食に魅力を感じ、進路決定において、しっかりと行動していける教育指導を農

業大学校と高校が連携して、あらためて考えていく必要がある。

新潟県においても、上級校への進学熱が高まっている中で、県外進学で県に戻る学生がきわめて少ない現状にある。県内で学び県での担い手確保に向け、とくに農業分野での農業大学校教育に科せられた担い手育成の課題は大きい。

### (2) 農業大学校がめざすこと

あらためて、農業大学校教育の特徴は何かを考えると、実学・実践教育ははずせない。

実践教育とは、赤ちゃんがそうであるように、人の成長には理論からではなく、実践から始まるのであり、その基本は、「見て、さわって、体験して、考える」教育。つまり、「まず実践し、その理論を学び、そして考え実践することにある。実践すること、考えることを車の両輪として、実践の技術力と思考力を持った教育修了者を社会に送り出すことが、県内唯一の農業専門の大学校としての役割と考える。

全国のトップブランドとして通用する新潟の農業は、大切な食料・食品を創り出す生命産業であり、彩りやうるおいを与えてくれる生活環境産業として地域社会を支えている。

現在の社会は、世代交代の時期である。その社会基盤を支える農業は、いま課題となっている自給率向上が可能な先進国型農業の実践をめざして、生産・加工・流通・販売を総合的に取り組める「第 6 次産業」として社会で活躍できるチャンスが、いま多くある。

常に、「できるかどうかではなく、やるかどうか」と前を向き、すべての産業の基盤としての「農業は文化である」を意識し、今がチャレンジのチャンスの時と指導していきたい。

農業専門の大学校として、生命産業、生活環境産業を支えるという大きな魅力を理解できるよう、今まで以上に情報発信をしていくつもりでいる。

農業大学校は、新潟で学び、新潟で働く。そんな人を大切に支援、応援していきたい。

そして、「生きものを育てる」をステップに、「実践する、考える」を自分づくりの起点の一つにおいて、新潟の大地にしっかりと立って、なにごとにもチャレンジする「農食彩のエキスパート」を一人でも多く地域社会に送り出していきたいものである。